

2026年度

課題

(時間……100分)
(配点……200点)

注意

1. 試験開始の合図があるまで、課題文や解答用紙に触れてはいけません。
2. 解答を始める前に、必ず解答用紙の所定の欄に座席番号を記入しなさい。
3. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入しなさい。

次の文章を読み、下記の問いに答えなさい。

私たちは今、つねに膨大な情報に囲まれています。情報は「あればあるほどいい」のでしょうか。そうとは限りません。

私たち人間はつねに、無意識のうちに情報の取捨選択を行っています。たとえば道路を歩いているだけでも、看板や道路標識、行き交う車や歩行者など、周囲は情報の山です。

しかも周囲の状況は刻一刻と変わり、あなた自身が前進すればまた状況が変わります。その膨大な情報から、たとえば「信号が赤になった」とか「車が曲がってきた」など、必要な情報だけを選び出し、それ以外の多くの情報を捨てています。

この「情報を捨てる」作業がうまくいかなければ、情報の海で溺れてしまいます。それではほとんどの場合、必要な情報もそうでない情報もまとめてスルーしてしまうのです。

しかし、もし、道路を歩いているときにすべての情報をスルーしてしまったら、どうなるのでしょうか？ 信号をスルーして道路に出たら、車にひかれてしまうかもしれません。人にぶつかったり、工事の穴に落ちてしまったり……。どう考えても危険です。

ですから、必要な情報を適切に取り込むためには、何らかの形で情報を絞り込む必要があります。思考バイアス*による無意識の情報の取捨選択や重み付けは、その役割になっているのです。

もちろん、思い込みなしに世界と対峙できれば素晴らしいことです。でもそれは、できないことなのです。思い込みなしに世界に放り込まれたら、情報の海に溺れるしかないからです。(中略)

今、私たちは情報を無意識に取捨選択している、と言いました。私たちはつねに、ある種の「信念」や「仮説」に基づいて、自分の信念や仮説に合う情報に注目し、合わない情報はスルーしています。無作為やランダムに行っているわけでも、フェアな観点で情報を集めて検証しているわけでもないのです。

このような、「自分に都合のいいデータだけが無意識に目立って見え、そればかり集めてしまう」「反対に、都合の悪いデータは無意識に軽視してしまう」という傾向を「確認バイアス」といいます。この「確認バイアス」こそ、最近とくに意識し注意しなければいけないバイアスだといえるでしょう。

なぜかというところ、「エコーチェンバー」現象によって、このバイアスが無自覚に、そして必要以上に強化されてしまっているからです。

「エコーチェンバー」とは、インターネットのアルゴリズムによって引き起こされるもので、ある特定のことを調べたりサイトや動画を見たりすると、それと同じ種類の情報ばかりが表示されるようになるというものです。

たとえば、何かの事件についてニュースサイトで見たらその後、そのニュースに関連する

情報ばかりが表示されるようになる。あるブランド品を購入したら、そのブランドの違う商品の広告ばかりが表示されるようになる。SNSで自分の意見を述べたら、その意見に近い人の意見ばかりが表示されるようになる……。

いつでも自分のスマホやパソコンの画面にそうした情報が表示されれば、「世の中から注目されている重要な情報なんだ」「このブランドは広く知られているんだ」「みんなが同じ考えを持っているんだ」……などと、無意識のうちに思い込んでいってしまいます。

要するに、エコーチェンバーは、人間の「確認バイアス」を、インターネットが人為的に増幅させているものなのです。

もちろん、インターネットがない時代、それどころか「歴史」といわれる頃から「確認バイアス」はありました。

作物を育てているときに、ちょっとした気候の変化や作物の状況を見逃さずに対応するためには、「確認バイアス」が不可欠です。広い森の中で、オオカミやクマなどの動物の痕跡をすばやく発見するためにも「確認バイアス」を働かせてきたはずですが。

外界にある情報は無尽蔵です。そのすべての情報に注意を向けようとしたら、その間に身に危険が迫っているかもしれません。そうした環境で生き抜くには、ある種の仮説を持ち、自分の探したい情報を探さなければなりません。

つまり、人間である限り、どんな人でも「確認バイアス」から逃れることはできないのです。

しかし、それがエコーチェンバー現象を受け入れるほどに必要かというところは、私には思いません。エコーチェンバー現象が今後ますます増幅されれば、待っているのは、誰もが「自分の持っている情報こそがみんなに注目されていて、みんなが同じ意見を持っているものなんだ」という思い込みを持っている、そんな世界ではないでしょうか。

自分と他人の違いを認められない、物事を多角的に捉えることの必要性さえ感じない人が増殖してしまった社会は、とても危険です。

私たちは、はるかかなたの祖先から、バイアスを持っています。そのバイアスを過度に増幅させるような仕組みには、注意を払うことが不可欠なのではないでしょうか。

*バイアス：偏り。

(今井むつみ【人生の大問題と正しく向き合うための認知心理学】より)

問1 著者の考えを300字以内で要約しなさい。

問2 著者の考えに対するあなたの意見を500字以内で述べなさい。

2026年度

課題

(時間……100分)
(配点……200点)

注意

1. 試験開始の合図があるまで、課題文や解答用紙に触れてはいけません。
2. 解答を始める前に、必ず解答用紙の所定の欄に座席番号を記入しなさい。
3. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入しなさい。

次の文章を読み、下記の問いに答えなさい。

日本には「人情」という言葉がある。この言葉は、欧米的な知性からみれば、あいまいで、情緒的なものと考えられやすい。庶民の世界を中心にまかり通ってきた、日本人的な感情として、嫌われる向きもある。

しかし、私は長い間の国際交流の活動の中で、特にヨーロッパやアメリカの先進諸国の美術関係者、あるいは優れた文化人たちと接触するようなどきでも、最後に通ずるのは、お互いの人間性によってである、ということを感じさせられてきた。そういう場合の人間性は、私たちの言葉である人情と置きかえても、そう間違っていないのではないかと考えている。

たしかに、欧米の知識人は、一緒に仕事をするにしても、相談をするにしても、非常に合理主義的で、原理原則をきっちりふまえて、論理的に対応してくる人が多い。中国などでもそうで、人民の立場の主張というものが、はっきりしている。実際に難しい仕事にとりかかろうという段になると、契約をし、文書をとり交わして、どこまでも厳密だ。日本人同士のように、極端な場合には、かなり重大な約束を電話一本で、などということはまず考えられないのである。

ところが、そういう欧米の人々とのあいだでも、本当にものごとが進み、仕事成り立つのは、契約や文書によってではなく、結局は人と人との信頼関係であることがわかってくる。契約や文書は、相手を信頼する理由がないためにとり交わされるものだ。契約をしたんだから、とその上にあぐらをかいていたのでは、何事も始まらない。目的に向かっての熱意や努力を十分に示すことが、相手を動かすのである。ゴリ押しという意味ではなく、そこが人間性と人間性のふれ合いなのだ。こちらの人間性を理解してもらうことができれば、一見つけ入る隙なく理論武装しているように見える欧米人とのあいだにも、契約や文書を超えたことが、いくらかも起こる。また、そうならなければ、めざましい成果をあげることは難しい。

欧米の先進国に限らず、それぞれの国に特殊性はあるものの、事情はどこでも同じである。人を動かすものは、最終的には人間性で、これを平たく言えば真心が通じることであり、人情に近いものである。つまり、昔から言われていることではあるが、いろいろな国籍や民族の問題がある中で、人情こそは万国共通の、大切なものだ。ただし、ここで人情といっているのは、観光旅行に出かけて、旅先で親切にされたから、世界中どこへ行っても人情は変わらない、という程度のことではない。その程度の認識で国際的な仕事にかかわったら、たちまち厚い壁に突き当たることになる。人情が人情であることに変わりはないけれども、お互いの利害や立場のからむ場面では、人情にたどり着くまでに乗り越えなければならないものがあるということなのだ。

ところで、その人情が、このごろ肝心の日本人自身の中で、だんだんに薄れてきているのではないか、という気がする。社会のあらゆるところで損得づくで動く姿が目立ち、意気を感じて、自分自身の利害を捨てて、世のため人のために働く人が少なくなった。人と人とのつき合いで言えば、人には誰にも浮き沈みというものがあり、困ったときにはお互いに助け合うというようなことは、主義主張などは別として、昔からあったことである。また、自分を犠牲にして世のため人のために働く人がいたからこそ、新しいものへの突破口が開け、時代が前に進んできた。たとえば江戸時代のころ、通行人の難儀を見かねて橋を架かるというようなことにしても、当時としては大事業で、犠牲になる人が出なければ実現しなかったのである。

日本が今日のような豊かな時代を迎える中で、日本人の人情が薄れてきたのには、いろいろな理由があるに違いない。ただ、残念なのは、人情という言葉のもっているものを、よく考えもしないで、わけもなく軽視し、捨ててしまおうとする風潮があることである。それならば、人間性という言葉、あるいは人権という概念が、どれだけ私たち日本人の身についているだろうか。人間性、人権という言葉の理解はバラバラであっても、人情といったときには、自分たちの歴史の、また暮らしの中から生まれてきた言葉として、日本人なら誰でもよくわかる。私は、これが大切なことだと思うのだ。

海外へ出て活動するような場合にも、人間性や人権を自分なりの理解で振りまわすよりも、日本人の人情というものをしっかり持って当たる方が、かえって外国人にはわかりやすいのではないと思う。だから、国際性というのが、人情などという日本的なものを捨てることだと考えられているとすれば、そこに誤解があるのだ。相手を理解する必要があるが、日本人の方も、自分たちの言葉、自分たちの心というものを、はっきりさせる必要がある。そして、相手が国や民族の壁を乗り越えて人間、個人として接してくれたとき、それを日本人流に人情が通じたと思ってかまわないと思うのである。

私は、日本が豊かになって、何でもカネやモノで押し通し、日本人同士でもそうだが、国際的な場でも、本当に相手の心を動かす力を持っていくのではないかと恐れている。

(平山郁夫「絵と心」より)

問1 著者の考えを300字以内で要約しなさい。

問2 著者の考えに対するあなたの意見を500字以内で述べなさい。

2026年度

課題

(時間……100分)
(配点……200点)

注意

1. 試験開始の合図があるまで、課題文や解答用紙に触れてはいけません。
2. 解答を始める前に、必ず解答用紙の所定の欄に受験番号を記入しなさい。
3. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入しなさい。

次の文章を読み、下記の問いに答えなさい。

「弱いロボット」という本がある。豊橋技術科学大学に岡田美智男さんという先生がいて、彼がそのふしぎなロボットをつくっている。

たとえば「ゴミ箱ロボット」は、ゴミを見つけることはできるけれど、自分で捨てることができない。まごまごしている彼を見ると、通りかかった人は、つい代わりに拾ってあげてゴミ箱（つまりロボットの彼）の中にゴミを放り入れてくれる。

ロボットのくせに人の力を借りている。人の力を借りるロボットなんて不完全な代物だ……と思う人のほうが多いだろう。しかし視点をちょっと変えると、道行くアカの他人にゴミを拾わせてしまうのだから、彼には「他者を巻き込む力」があるとも言える。おまけに道行く人に思わぬ善行のチャンスさえ提供してあげている。

他者を巻き込むその力の源泉はどこにあるのか。それは、ひとりではゴミを拾えない、つまり彼自身の中で行為が完結しないという「弱さ」にある。(中略)

弱いロボットはその弱さゆえに、自己完結できずに他者に聞かれている。が、まさにそれゆえに多くのことを為すことができる。

これで思い出すのが、「リハビリの夜」の熊谷晋一郎さんが言った「多くの人や物に依存できることが自立の条件である」という言葉だ。依存しないことが自立、という一般通念とは真逆だ。なぜ熊谷さんはそんなふしぎな言葉を思いついたのだろうか。

電動車いすに乗っている熊谷さんは、東日本大震災のときに東大の研究室にいた。揺れが来てすぐに避難しようとしたが、エレベーターが動かず研究室にとどまらざるをえなかった。歩ける人は階段で地面に下りることができたが、熊谷さんはエレベーターなしには避難できない。このときエレベーターだけに依存している自分と、階段でも下りられるし、いざとなれば避難ハシゴだって使えるという健康者とを比較して、「依存先が一つしかない」ことのデメリットを身をもって知った。

ここから熊谷さんは、「自立を目指すなら、むしろ依存先を増やさないといいない」と言う。

健康者は何にも頼らずに自立していて、障害者はいろいろなものに頼らないと生きていけない人だと勘違いされている。けれども真実は逆で、健康者はさまざまなものに依存できている、障害者は限られたものにしか依存できていない。依存先を増やして、一つひとつの依存度を浅くすると、何にも依存しないかのように錯覚できます。

(熊谷晋一郎さんへのインタビュー、『TOKYO人権』2012年冬号、3頁)

笑っせえるすまん*的に言えば「健康者はすでに依存している！ ドーン!!」である。しかし熊谷さんはやさしいので、指摘してショックを与えるだけで終わらせずに、こんなふうに結論づける。

実は膨大なものに依存しているのに、「私は何にも依存していない」と感じられる状態こそが、「自立」といわれる状態なのだろうと思います。(同頁)

あなたはたしかに自立している。しかしそれは、自分では気づかないかもしれないけれど、多くのものに依存できる環境があっただけで成り立つことなのだと。

熊谷さんは日常生活の多くを介助者に頼っている。しかし特定の介助者がどんなによい人であっても、その人だけに介助を頼るようなことはしない。必ず複数人に介助先を分散している。

その人が病気で倒れたりしたら困るから、という理由だけではない。その人に離れられたら困るという状態になると、熊谷さんとその人のあいだに支配-被支配関係が強く発生してしまうからだ。部分的にでも信頼できる人が複数いれば、それらの人に少しずつ依存して、つまりタコ足のように多方面に足を伸ばすことによって、自らを支えることができるだろう。こうして「自立とは依存先が分散されていることである」という先の名言が生まれた。

この言葉はたいへん含蓄が深い。

たとえば世に「依存症」と呼ばれている人がいる。その人たちはアルコール依存症なら酒、薬物依存症なら薬に「好きで溺れている人」と一般には思われている。そうではない、と熊谷さんは言う。酒や薬以外に「依存できる物」がないから、あるいは物ではなく「依存できる人」がないから、結果として酒や薬だけに依存せざるを得ないのだと。

健康といわれる多くの人は、つらいことがあれば友人や同僚に愚痴り、気がふさげばジョギングをし、ときには仕事に過集中してその場をやり過ごすように、多くの依存先を持っている。つまり依存症とは、依存先が一つとか二つとか極めて乏しい人のことであり、言ってみれば「依存症の人は依存先が足りない」のである。

*笑っせえるすまん：藤子不二雄^④によるマンガ作品。

(白石正明『ケアと編集』より)

問1 著者の考えを300字以内で要約しなさい。

問2 著者の考えに対するあなたの意見を500字以内で述べなさい。